

# 国策への怒りが私の闘いの原点

奥間政則

今年2022年5月13日に沖縄県の浦添市にある社会福祉センターで、「琉球弧の軍事要塞化を許すな！「5・15復帰」50年を問う」という集会があり、私は発言者として参加した。

いつものことだが、講演や学習会がある時は直前まで資料の準備に没頭する日々が続く。夕方6時からの集会だったが、この日も誰よりも早く1時には会場に着いて、開場するぎりぎりまでいろんな資料作りをしていた。

集会が始まり、知花昌一さんや金城実さんといった沖縄の復帰闘争の歴史に名を残すような方々の熱い話を聞いて、時間も押していたこともあり、いつものような現状報告だけの話をするのをやめて、私がなぜ運動に関わったのかという話をすることにした。

これまでも私の講演は、作った資料に沿って話をするという型にはまったやり方はせず、会場の雰囲気や話の内容を変えるということをしたこともあったが、せっかく作った資料を一切使わず話だけで終わらせたのは初めてのことだった。知花昌一さんや金城実さんたちの日本史に載らない沖縄の話は、私の講演スタイルを変えるくらい強烈なものだった。

集会に参加された人たちは、基地問題に関しての土木技術者またはドローン活動といった話以外の事を聞いたことがない人が多かったのではないだろうか。いつものように土木技術者として基地反対運動に関わってきたことで、根拠に基づいた理論的な話をするのとは違い、ハンセン病問題を語るときは、技術者の奥間ではなく、国策に翻弄された両親の辛い思いを胸に、一人の人間として、日本という国の国策に対する怒りを込めて話をするので、熱の入り方がまったく違う。

基地問題の話だけだと、それに関心を持った人しか来ないので同じ顔ぶれが集まる集会になりがちだが、私はハンセン病の問題についても話をするので、いろんな人たちが講演を企画してくれて、一般の人たちも私の話を聞いてくれる。

特にハンセン病の話をするときは、冒頭にジャーナリスト鎌田慧さんの東京新聞のコラムを引用して話をするようにしている。2018年1月23日の東京新聞のコラムに『無関心の罪』というタイトルの鎌田慧さんの記事が掲載されていて、国に対してハンセン病の差別を痛烈に批判した記事だが、このコラムで私の心に強く残ったのが文末にある「排除した「社会」の側にわたしたちがいた。無関心は支持であり共犯である。」というコメントだ。

ハンセン病の差別は国だけの問題ではなく、無関心な国民にも責任があるということを鎌田慧さんは訴えている。そしてこの無関心こそ最大の敵であり、腐敗した政府を作っているのもこの無関心層であることを、運動に関わるようになって知るようになった。

## 人それぞれのタイミング

私はこれまで市民運動に関わってきたことがなかったので、沖縄の復帰運動や基地闘争という歴史も知らないし、生活の中で必要と感じてこなかったのも、“ネトウヨ”という言葉も運動に関わってから知ったくらいのもので無知で無関心な男だった。まさに鎌田慧さんが指摘している無関心な日本人そのものだった。



しかし、今は違う！人それぞれ何か気づくタイミングは違うし、また気づいたとしても関わりたくないから見過ごしてしまうこともあるだろう。私がそうだったので無関心な人の心情がわからないわけではないが、私自身が気づいたのではなく気づかされたのだ。

だから、無関心な人でも変われるんだということを私自身が実感している。

私は 1 級土木施工管理技士の資格を持った土木技術者として、いつでも現役復帰できるスキルを持っているが、今は本業を休業してまで基地反対運動に関わっている。実際に現場に来てほしいと土建屋二社から連絡があったが、それも断って今の活動に専念しているのは、これまで仕事を理由に見てみぬふりをしてきた人生を変える大きな出来事があったからだ。それを無視して普通の社会に戻るつもりはない。

日本という国の本性を知った人たちは後戻りはできないだろう。私もその一人だ。

## 人生を変えた二つの出来事

私が基地反対運動に関わったのが 2015 年からである。それまで基地問題や政治にも無関心な男だったが、2015 年に人生が変わった。私は今、全国で沖縄の基地問題とハンセン病の差別問題について訴えている。私の活動の原点は国策に対する怒りだ。

### 1. 基地反対運動に関わったきっかけ

2012 年にオスプレイ配備に反対する 10 万人規模の県民大会に参加したことで、県民の基地反対の熱い思いを感じた。その後 2014 年に翁長知事が誕生し、2015 年の 5 月に辺野古新基地建設反対の県民大会に参加することで、多くの県民と共に基地建設に対する反対の意思を強めることになった。

運動にかかわる 10 年以上前から、同じ大宜味村の江洲という部落で辺野古・高江の運動に関わっている儀保昇さんに、一緒に基地反対運動に参加しないかと誘いがあったが、そのたびに仕事を理由に断っていたが、2015 年 5 月の県民大会は儀保さんに誘われて参加した。会場の周りを右翼の街宣車ががなりたてて回っていたが、そんなノイズなど那覇市のセルラースタジアムに集まった県民の熱気で吹き飛ばすほどすごかった。

私は土建屋として会社で働いていたが、2009 年に会社を辞めて個人で管理業務を請ける仕事をしていたので、ある意味自由に動けることで県民大会にも参加できた。その大会が終わったその日に儀保さんから高江に来てみないかと誘われ、2 日後に東村高江の米軍の北部訓練場ヘリパッド建設反対の座り込みに、初めて参加するようになった。

ちなみに、県民大会の翌日にハワイで米軍のオスプレイが墜落したニュースが流れたので、さすがに訓練は中止していると思いきや、高江ではオスプレイが普通に飛行訓練をしていたのには唾然とした。

### 2. ハンセン病の差別問題に関わったきっかけ

私の両親は元ハンセン病患者だが、両親は一切ハンセン病のことを語らなかった。幼い頃父は酒に酔うと家族に暴力を振るっていたので、私はそれ以降心を閉ざし父を憎んだ。幼い頃に DV を経験した人は大人になっても心の傷は治らない。それは私もそうである。

時は流れ 2012 年ごろから父が手記を書くようになり、その中で戦後ハンセン病を発症したことが記されていたが、その時も父はハンセン病の差別について話すことはなかった。

そしてさらに時が流れ 2015 年の 6 月に両親が入園している名護市のハンセン病療養所「愛楽園」に、交流会館という資料館が開館したことで、自分でハンセン病のことを学ぶために通うようになり、学芸員の辻さんから『ハンセン病証言集』の中の伏字で書かれている父の証言を見せてもらおうと、そこには手記にも記されていなかった事実があった。

奄美大島のハンセン病療養所「和光園」で母と出会ったこと、私とその「和光園」で生まれた理由（断種・墮胎がない施設）、シスターに育てられていた理由、当時愛楽園でも国策で断種・墮胎が行われていたことなど、そして父はハンセン病が治って社会復帰しても、ハンセン病に対する世間の差別・偏見を受けていたという事実を、生まれて 50 年経って初めて知った時の衝撃はあまりにも大きかった。何も語ってこなかった父の生き様がすべてこの証言集に記されていたのだ。

父の証言の 4 ページ目に、「会社での嫌がらせ」という文章があり、ハンセン病と知った同僚から嫌がらせを受けていて、耐え切れなくなってその会社を辞めてほかの会社に移ってもハンセン病と知ると偏見の目で見られたことが書かれていた。

まさに家族に暴力を振るっていた時期と重なっていて、一人で悩み苦しんで酒に逃げるしかなかった当時の父の心情を知ったとたん、学芸員の辻さんの前でボロボロ涙があふれ出て止まらなくなり、あまりにも辛くて思わずトイレに駆け込んで声を上げて泣いた。

父の苦しみを知らずに何十年も憎んでいた。私の誤解はすべて国策によって引き起こされた世間の差別であり、親子の絆までもがズタズタにされていたのだ。

父の証言の冒頭には「今は子供に残せるものは何かを考えてる」と記されている。幼い頃暴力によって心を閉ざした息子は大人になっても口を利いてくれない。その息子に真実を伝えたいという思いで聞き取り調査に協力したのだろう。しかし名前を伏字にしたのは、自分が亡くなった後、いつか息子に気づいてもらいたかったのだ。この証言集に書かれた事実が私の人生を大きく変えた。父への憎しみは消え、国策への怒りに変わった。

### 3. 国策と闘う覚悟を決めた2015年

沖縄戦で本土上陸を防ぐために住民を犠牲にした日本という国が、国策の名の下で沖縄に基地を押し付けてきたことと、国策の名の下でハンセン病患者を世間から隔離し、ハンセン病を根絶する名目で断種・墮胎という世界でも類を見ない非人道的なことを行ってきた事実を知り、基地問題もハンセン病の問題も形は違うが、弱者に対してしわ寄せがくるといふ点において、国家権力によって行ってきた『差別』の構図は同じものだと気づかされた。私の両親が戦争の被害者であり、ハンセン病差別の被害者でもある。

基地反対運動への参加、父の手記、愛楽園の証言集など、今まで止まっていた歯車が一気に動き出すように、時を見計らっていろいろな出来事が重なり、沖縄の基地問題とハンセン病問題にも向き合うようになったのが同じ 2015 年である。1965 年に生まれてちょうど 50 年という節目の年に、これまで無関心だった私の人生は一変し、日本の国策による差別と闘う覚悟を決めた。

## 沖縄の基地問題に無関心と言われている日本人

日本人は沖縄の基地問題に無関心と言われるが、私はそうとは思わない。日本人は潜在的に沖縄に危険な基地があることを認識しているはずだ。

そのことがよくわかるのが 2001 年 9 月 11 日のアメリカ同時多発テロ事件だ。この事件は多くの人たちの記憶に残っているだろう。私は今でもこの事件のことをはっきり覚えている。当時は古宇利大橋建設現場の責任者として日々多忙な業務をこなしていた頃で、現場事務所から自宅に帰ってきて何気なくテレビをつけると、NEWS23 の映像で、アメリカのツインタワーに旅客機が激突するシーンが映し出された。状況が飲み込めていなくて何かの映画の特撮シーンだと思ったが、それが同時多発テロ事件ということを知ったときに身震いがした。現実にもこういうことが起こったのだと…

テロ事件が発生した直後、沖縄に来る観光客が激減した。新聞もテレビもそのことを連日取り上げていたので、日本人は沖縄に米軍基地が集中しているから攻撃の対象にされると察したのが顕著に現れている。

去年(2021年)の4月に、沖縄国際大学から琉球弧の軍事化について話をしてほしいと講演依頼がきた時、地元沖縄の学生にどういう切り口で話をしようかと悩んだ。いつもの基地反対運動に関わっている人に話すような内容では学生は興味を示さない。私もそうだったが、生まれたときから基地のある沖縄で育った若者にとって、基地があって当たり前の生活をしていると基地問題に関心が薄いのは仕方のないことだ。よっぽど具体的な事実を話さないと実感がわかないだろうと考え、学生に興味を持ってもらうために思いついたのが 2001 年に起きた 9.11 アメリカ同時多発テロ事件だった。

沖縄に基地があることの危険性を認識してもらうために、このテロ事件のことをいろいろと調べてみると、内閣府がそのときの沖縄の経済状況を調査した興味深い報告書がネットに公表されていた。

「米国における同時多発テロ事件の影響」というタイトルでまとめられている報告書には、遠いアメリカで起きたテロ事件の影響で、沖縄の観光産業に大きな打撃を与えたことが数値で示されている。

琉球新報 2001 年 9 月 28 日



第2-2-2表 10月に入り米国テロの影響が顕著となった航空乗客輸送実績人数（国内線）

	輸送実績人数			
	2001年 (人)	2000年 (人)	対前年同期比	
			比率	増減(人)
7/1~31	416,865	340,433	122.5%	76,432
8/1~31	513,106	511,644	100.3%	1,462
9/1~10	154,015	153,964	100.0%	51
9/11~20	129,243	133,886	96.5%	△4,643
9/21~30	133,738	123,387	108.4%	10,351
10/1~10	110,927	129,306	85.8%	△18,379

テロ事件発生後の実数

(備考) 沖縄県観光リゾート局「月間途中の航空乗客輸送実績表」より作成。

第2-2-3表 キャンセルが増加した沖縄県への団体旅行

区分		キャンセル	2000年度実績	割合(%)
修学旅行	学校数	363	1,596	22.7
	人数	84,790	303,672	27.9
一般団体旅行	団体数	460	-	-
	人数	17,524	4,217,528	0.4
計	団体数計	823	-	-
	人数計	102,314	4,521,200	2.3

- (備考) 1. 沖縄県観光リゾート局発表による。  
 2. 集計は、旅行代理店6社からの聞き取りによる。2001年10月11日15時現在の実績。  
 3. 2002年3月までの予約分について。個人客を含まず。

出典:平成13年度 地域経済レポート2001 平成13年11月 内閣府政策統括官  
[https://www5.cao.go.jp/j-j/cr/cr01/chiikireport01\\_koramu.html](https://www5.cao.go.jp/j-j/cr/cr01/chiikireport01_koramu.html)

私の話を聞いた学生たちは大学3年生なので、テロ事件が発生した年は生まれてまもないから実感がないだろうが、こういう政府発表の具体的なデータを見せて説明すると、基地があればそこが標的にされるということを理解したと思う。

### 無関心な若者という間違った考え

多くの大人は「今の若いものは！」と上から目線で、若者を過小評価しているが、私はそうは思わない。多くの学生の前で話をする機会があり、若者への手ごたえを感じたことがある。

私は2017年から全国で講演活動をするようになり、いろんな団体から講演依頼が来るようになった。2019年10月に新潟の敬和学園大学から、学生に向けて沖縄の基地問題とハンセン病問題について話をしてほしいと依頼が来た。これまで2年近く全国で講演をしてきたので、参加者のニーズに応えるノウハウが身につけてきたと自信を持っていて、気軽に講演を引き受けたが、大学で200人の学生の前で話をするということは初めてのことで、資料作りをしているときにスランプに陥った。

これまで関心のある人たちに話をしてきたので、皆さんその心構えで参加してくれているが、大学で授業の一環として外部講師を招いての話となると、まったく興味のない学生たちにこれまでのように話しても、ちゃんと聞いてくれるのかという不安が出てきて、1ヶ月前に依頼を受けたがまったく資料作りができない状態が続き、実際に資料が出来上がったのが講演当日の朝6時だった。本当に悩みに悩んで作った資料が今に活かされている。

朝10時に大学に伺い、最初に学長から話があったのが「授業の一環として単位を取るために来ている学生もいますから、中には寝ている子やスマホをいじっている子もいると思いますので、それは勘弁してやってください」と言われた。学長もこれまでそういう状況を見てきたので、あらかじめ講師にはそういう話をしているのだと理解した。

私は常に作業服姿で講演をする。土屋屋も基地建設反対なんだということを知ってもらうためだが、作業服姿の人がどんな話をするのか学生も興味津々だっただろう。

最初に話したのがハンセン病の問題だ。学校教育の中で国策によって世間に差別・偏見を植え付けたことなど教えることはない。そしてその差別によって家族の絆が引き裂かれた話、断種・墮胎によって生まれてくる子どもを殺してきた話など、これまで聞いたことがな

い日本という国の実態は衝撃的なことばかりだったはずだ。そして幼い頃私が受けていた父の暴力が世間の偏見・差別が原因だという話をするとき、悔しくて涙が出て言葉が詰まった。それくらい感情を込めて話をするので、学生たちも真剣に聞いてくれていた。

ハンセン病の話の最後に「学校教育の中で教えるべき国が犯した過ち」というタイトルで日本という国は過ちを犯しても隠蔽する体質があることや、世の中から排除されてきた弱者の苦しみを後世に残すためにも、学校教育の中でしっかり伝えることで過去を反省すべき。また国民も政府に忖度することなく差別に向き合ってもらいたいと締めくくった。

ハンセン病の問題を終えたあとに沖縄の基地問題について語った。最初にドローンで撮影した各島々の写真はインパクトがあり、観光地としてしか知らない沖縄の島々の至る所に軍事施設ができていたことを初めて知ったはずだ。沖縄島に関しては沖縄県が作成した米軍基地マップを見せながら説明したので、いかに沖縄島が軍事基地の島なのかも知ってもらったと思う。そして辺野古のゲート前では機動隊が無抵抗の市民を強制的に排除するところを、写真を見せながらメディアも報じない実態を語った。ネットでしか沖縄の基地問題を知らない学生にとって、現場で政府と闘っている人の話は貴重なものだったはずだ。

さらに防衛省交渉の場では官僚相手に土木技術者として毅然と根拠に基づいた追及をするところも写真を使って説明した。現場を経験した技術者の視点で、辺野古のにごり水が流出している決定的瞬間をドローンで撮影したことも伝えた。締めくくりは沖縄島の北部にある本部港で米軍の軍事訓練を市民の力で止めた話も、ドローンの写真を使って説明した。

90分という限られた時間の中でハンセン病の話から沖縄の基地の現状の話をすべて出し切った。会場を見渡しながらか話をしていたが、誰一人寝ている子もスマホをいじっている子もいなかった。そのときの様子を学長もずっと見ていたらしく、講演が終わったあとに学長が「これだけ学生たちが真剣に話を聞いてくれたのは初めてです」と喜んでくれた。

若者たちは決して無関心ではない。心を込めて話をすればみんな真剣に聞いてくれるということを教えてくれた私にとっても貴重な講演だった。

## あつまれ辺野古の活動

### 1. 民衆を動かした辺野古ゲート前の500人集中行動

私は「あつまれ辺野古」という小さなグループに所属している。このグループが結成したきっかけが2018年2月に行われた名護市長選の敗北だった。現職の市長の稲嶺進氏が優勢といわれていた選挙だったが、ふたを開けてみると政府が全面的に推していた辺野古新基地建設推進派の渡具知武豊氏が勝ったことで、辺野古のゲート前はあきらめ感がでて、座り込みに参加する人が激減していった。

本来であれば既存の組織が多くの人に呼びかけて運動を盛り上げるべきだが、組織はまったく動く気配がなかったので、辺野古の工事をどうにかして止めたいという思いを持った有志が集まった。その顔ぶれは、2016年に国家の暴力があからさまになったあの高江のヘリパッド工事の阻止行動を共にした面々20人に満たない人たちだったが、どうやれば辺野古のゲート前に活気が戻るかみんなで真剣に意見を出し合った。

その頃辺野古では、第一土曜日はオール沖縄会議の呼びかけでゲート前には 500 人以上の市民が集まるので、機動隊が対応できなくて工事は止まっていた。メンバーからふとしたアイデアが出た。500 人集まれば工事は止まるんだったら、全国に呼びかけて 1 週間毎日 500 人の人で辺野古ゲート前を埋め尽くせば工事は 1 週間止まるという提案だ。

あつまれ辺野古のメンバーはどこ組織にも属さない寄せ集めのメンバーだが、組織と違うところは、誰かがアイデアを出せばまずやってみようという即行動に移せる実効性のある人たちばかりだ。議論や会議を重ねて物事を動かそうとすれば、スタートがいつになるかわからない。日が経てば経つほど人の気持ちは薄れ、辺野古の運動は衰退していくことを考えたら、今動かないといけないとみんなの気持ちは一致した。そして集まったその日のうちに「辺野古ゲート前連続 6 日間 500 人集中行動」という正式名も決めて動き出した。

2 月の後半から動き出して、実行日は 4 月 23 日から 28 日と決めて全国にも周知をして、私と儀保さんは共同代表として琉球新報と沖縄タイムスに論壇を投稿して県内にも広く告知した。あつまれ辺野古の行動は早かった。一気に動き出し全国からも多くの賛同を集め、オール沖縄会議も動かざるを得なくなり、全面協力したことで大きな流れができた。

政府もこの大きな行動を黙って見過ごすつもりはなかったが、県内の機動隊だけでは対応しきれないと判断して、駐在所勤務の職員から警察署内の職員まで動員して辺野古の市民弾圧に当たった。

そして始まった集中行動初日、あつまれ辺野古の起こした行動は世論を大きく動かした。朝 8 時半を過ぎた時点で 300 人ほどの人が集まり、9 時から機動隊の排除が始まったが、その後続々と参加者が増え続け、排除しても排除しても後からどんどん人が座り込むので、2 時間半を過ぎた時点で機動隊の排除が止まった。勝利を確信した多くの市民が歓声を上げた！

しかし政府も市民に止められることは絶対にさせたくなかったようで、防衛局から機動隊に何が何でも阻止しろと命令がきたのだろう、機動隊は中央部を強引にこじ開け座り込んだ市民が分断された。しかし反対側の歩道にはまだ多くの人たちがいたので、そのときの指揮者が指示すれば中央部にも人がなだれ込んで形勢逆転することができたのだが、指揮者はそれをしなかった。明らかな判断ミスが勝利を逃してしまった。

オール沖縄会議がこの行動に協力した時点で、あつまれ辺野古の指揮権がなくなったのが悔しかった。

2 日目からは政府も警備体制を強化し、かまぼこを追加して歩道の一部を即席の檻にして排除した市民を檻の中に閉じ込めるということも始めた。

500 人行動は月曜日から土曜日まで続いた。稲嶺さんが名護市長選で負けて辺野古のゲート前が閑散としていて、島ぐるみのバスもがらがらの状態が続いていたが、この集中行動の期間中は多くの人が殺到してバスに人が乗り切れなくらいだったそうだ。私は事前告知で沖縄タイムスに



初日 8 時 15 分 機動隊到着



11 時 44 分二時間半経過、機動隊排除できず



歩道を檻にして市民を閉じ込めた

投稿した論壇の締めくくりに「政府が恐れているのは民衆が立ち上がることです！みんなで辺野古を止めましょう」と記した。われわれあつまれ辺野古も 500 人の人たちが集まることを期待していたが、右図に示す通り予想を上回る多くの人が集まってくれた。

最終日の 28 日はオール沖縄会議主催の「4・28 県民屈辱の日を忘れない県民集会」があり、1,500 人という規模になった。

ダンプの搬入を完全阻止することはできなかったが、前の週と比べて 625 台の搬入を減らすことができた。4 月 23 日から 28 日までの 6 日間で延べ 4,750 人もの人々が参加した大行動を成功させ、あつまれ辺野古は大きな実績を残した。

図表：各行動日参加者数および搬入台数

行動日	参加者数	工事車両搬入台数
4/23 (月)	700 名	123 台
4/24 (火)	700 名	200 台
4/25 (水)	800 名	245 台
4/26 (木)	450 名	246 台
4/27 (金)	600 名	254 台
4/28 (土)	1500 名	0 台
合計	4750 名	1068 台

※前週比搬入台数：625 台減

## 2. 米軍の軍事訓練を止めた本部港での闘い

2019 年 9 月 17 日には、実際に米軍の軍事訓練を止めた大きな勝利があった。

米軍が伊江島で訓練を行うために、沖縄島の北部にある本部町の漁港から訓練用の大型ボートを搬出するという事を米軍は事前に沖縄県に通告してきた。沖縄県は米軍に港の使用を控えるよう求めたが、米軍は予定通り 9 月 17 日にボートの運搬を強行してきた。

事前の知らせを新聞報道で知ったあつまれ辺野古がいろんな運動組織に阻止行動を呼びかけ、本部町の島ぐるみなどの市民グループが賛同して 40 人ほどの人たちで港に入る米軍車両を止めた。(午前中は 60 人程度)

この時に今までの辺野古の闘いとは違うことが起きた。基地反対運動の人たちとは別に、港で働く港湾労働者（全港湾）が立ち上がったのだ！この動きは私たちも想定していなかったことだ。

普段から港で荷物の積み下ろしの作業をしている労働者なので体格は機動隊よりも大柄で、60 人のつわものが港のゲートの前で 3 列になってがちり立ちふさがった姿は本当に勇猛で、私たち市民グループの人たちも阻止するという気持ちは同じだが、年齢的にも体格的にも明らかに違う人たちだった。

今回ゲート前で指揮をしていた全日本港湾労働組合（全港湾）沖縄地方本部の執行委員長である山口さんとは、2018 年の 11 月に名護で一緒に講演をしたこともあり、港のゲート前に到着すると、山口さんの方から私に声をかけてきた。山口さんは基地反対の団体からの呼びかけではなく、新聞の記事を見て自主的に立ち上がったと話していたので、全港湾としても港を米軍の好き勝手にさせないという覚悟だったようだ。

朝 7 時前から米軍車両を止め、9 時ごろ機動隊が到着したが、機動隊も全港湾のことまで想定していなかった。排除することなくにらみ合いが続き、港のゲートが閉まるのが夕方 5 時、4 時前に機動隊も増員して動き出したのが 4 時過ぎだった。



8 時 44 分 少数の市民グループが車両を止め、全港湾がゲートをふさぐ



16 時 12 分 機動隊が米軍車両を包圍して排除が始まろうとしている



ボートをけん引している米軍車両を取り囲むように機動隊員が配置され排除体勢に入っ  
たが、指揮者はなかなか排除の号令をかけない！  
いつもの市民グループだけなら 15 分もあれば排除されただろうが、その後ろには鉄壁の守りで固  
めた全港湾のつわものたちが立ち塞がっている。

そしてとうとう 4 時 22 分機動隊が排除を断念  
して港から撤収し、4 時 37 分にはボートをけん  
引してきた米軍車両も引きあげていった。

市民グループと全港湾の人たちによって米軍  
の車両を止めたことで、伊江島で予定していた軍  
事訓練を止めた画期的な勝利だった！



16 時 41 分 入港を断念した米軍車両が港を出て国道を南下していく

市民の力で米軍の軍事訓練を止めたことは、アメリカ本国  
にも届いた。沖縄タイムスが 2019 年 10 月 7 日に「米政府注  
目 沖縄の抗議」と題して報じた。

記事には「元国防長官が、ほんの数十人の住民が米軍の訓  
練を中止させたことを率直に驚いた」ということが記されて  
いる。記事の最後には「非暴力で米軍の訓練を中止させた沖  
縄には、世界の在り方を問う「地場の力」が秘められている。  
私たちは、足元にある力を過小評価してはいけない。」と締め  
くくられていた。

この記事でもうひとつ重要なことが、「オバマ政権で大統領  
補佐官を務めた元要人が、本部港のデモにも県民運動(辺野古  
埋立てを巡る県民投票)にかかわった多くの市民や若者が参  
加していたら、国際社会の注目を集めていたのではないかと  
語った」と記されていることだ。

あつまれ辺野古として、辺野古の大きな組織にも参加要請  
をしたが動かなかった。沖縄の基地問題は辺野古だけではな  
い。多くの市民の結束が必要だ。

あつまれ辺野古は他にもあらゆる行動を実行してきた。去年(2021 年)の 11 月 26 日には  
本部町の八重岳にある通信施設での自衛隊の訓練も阻止した。そして同じく去年の 12 月 18  
日には米軍の海兵隊基地キャンプ・ハンセンでコロナのクラスターが発生という報道を知  
ると、米兵を基地の外に出さないために機動隊が到着するまでの約 1 時間、メインゲートと  
第 2 ゲートも完全封鎖したこともある。もちろんあつまれ辺野古だけでなく、呼びかけに賛  
同して駆けつけてくれた人たちも多かったです。

2019 年 6 月から安和からの土砂搬出が始まり、あつまれ辺野古は闘いの場を安和・塩川に  
移して行動している。そこは辺野古に土砂を搬出する港で、そこで数少ない人たちとともに  
ダンプの搬入を阻止している。その行動が辺野古の埋め立てを遅らせている。

2018 年 4 月に実現させた 500 人行動のようなことを、多くの市民は期待しているはずだ。  
日本に復帰して 50 年経つが、沖縄は今でも基地撤去のために闘い続けている。しかし沖縄  
県民だけでは政府との闘いに限界がある。政府がやることに無関心であってはいけない！

500 人行動の時に、私が沖縄タイムスの論壇に記した言葉を日本全国に発信したい。  
「政府が恐れているのは民衆が立ち上がることだ！」  
いい加減眼を覚ませニッポン人！

